

知恵の書 12章 13節、16-19節

ローマの信徒への手紙 8章 18-25節

マタイによる福音書 13章 24-30節、36-43節

本日の福音書は、イエス様のたとえ話の続きです。今回は、「毒麦」を題材としたたとえ話です。今回の箇所も、先週と同じように、たとえ話（24節～30節）とその解釈（36節～43節）という形になっています。

「イエスは、別のたとえを彼らに示して言われた。「天の国は、良い種を畑に蒔いた人に似ている。」（マタイ 13：24）とたとえ話は始まっていますが、本当に天の国（神の国）に説明するために、イエス様がこのたとえ話を語ったかどうかは分かりません。前半 24節～30節のたとえ本体の方が、イエス様自身が語った言葉に近いとしても、イエス様が語ろうとした本来の意味を正確に知ることは、ほとんど不可能です。しかし、現在ある文言から、イエス様が何を伝えようとしたのか推測することは出来ます。何故ならば、それは、農業を題材としており、現代の我々にも理解できる部分が残っているからです。

たとえ話を少しまとめてみますと、ある人が、麦畑に、「良い種」を蒔き、収穫しようとする。しかし、敵が来て「毒麦」も蒔いた。しかし、完全に実るまで「毒麦」を抜かずに、刈り入れの時に「毒麦」を集めて焼き、「麦」は、倉に入れる、というものです。「毒麦」をわたしは見たことはいのですが、「麦」とそっくりな植物で、実るまではわからないのだそうです。そして、うっかり食べると吐き気や下痢をするというものだそうです。

たとえ話にあるような出来事が、当時の農家の間でよく起こったことであつたのかわかりません。しかし、「良い種」を買ったと思ったら不良品だつた。しっかりと手入れをしいたけれども、鳥が余計なものを落としていって、撒いていないものが育つたというような場合はあつたと思います。その時どうするかという対策が、話として存在したとしても不思議ではありません。そのように考えますと、イエス様が、天の国（神の国）そのものについて、このたとえ話を語ったかどうかは不明だとしても、信仰の目的や、人生の目的、あるいは救いについて、このたとえ話を題材として語つたという可能性はあります。

ここでは、福音書にある通り、イエス様が、人々に天の国（神の国）について分かりやすく説明するために、このたとえ話を語つたという前提で考えますが、その場合、明らかに強調されている点は、「主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。』（マタイ 13：29）という部分にあります。つまり、神の国に入る人は、育っている途中の時点では分からない、刈り入れの時という最後まで分からないということです。

ただし、「両方とも育つまで待つ」という言葉の目的は、変化を期待してということではありません。「毒麦」が努力したら、「麦（良い麦）」に変わると

は言われていないからです。育つまで待つ目的は、「毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない」からです。その意味では、結論は、蒔かれた時点で決まっているともいえます。カルヴァンの有名な予定説を思い起こします。そのように考えますと、自分はどっちだろうかと、少し不安になるようなたとえ話ですが、この譬えが主張しているのは、今、結論は出ていないが、良い麦として歩みなさいということです。ただし、それは、何をしても、あるいはしなくても、自分たちは「良い麦」であるという自覚を持ちなさいということではありません。「良い麦」か「毒麦」か、それを最終的に判断するのは、主なる神様に他ならぬからです。そして、もし、「良い麦」か「悪い麦」かという問いを立てたとするならば、そもそも、天地創造の物語において、主なる神様は、造られたものすべてを良しとされました。その意味では、地上のすべてが「良い麦」なのです。イエス様は、主なる神様のその段階にもう一度立ち返り、すべての人が「良い麦」である前提でこのたとえ話を語り、主なる神様は、最後まで待ってくださっていると、すべての人に希望を与えたのだと思います。

それでは、36節～43節の部分はどうか。この部分は、イエス様の元来の言葉ではなく、マタイ福音書にかかわる教会の解釈であると考えられます。そして言おうとしていることは、「麦」か「毒麦」かは、最後にははっきり分かるという点は同じですが、毒麦は、恐ろしい状況の中で滅びると表現していることが特徴です。そのように明確に主張できるのは、自分たちは「良い麦」であり続ける努力を怠っていないという自覚の上にたっているからだと思います。それでは、マタイ福音書の中で批判されているファリサイ派の人々と同じなのかというと、そうではないのです。イエス様が最初にたとえ話で語られたことを理解し、自分たちの教会の活動に、一人ひとりの信仰生活に生かそうとしているが、その結果は、最後まで分からないという自覚をしっかりと持っているからです。つまり、何らかの条件を達成したら救われるという約束を信じるのではなく、すべてを主なる神様にゆだねて歩み続けるという信仰のあり方です。

そのことは、マタイ福音書が、あるいはそれを受け入れた教会が、教会とはどのようなものと理解していたか、そのことを示します。つまり、教会とは、約束された救いを実感する場所・人と人との交わりの大切さを実感する場所であると同時に、救われるか否かは最後まで分からないという緊張関係の中にある場所でもあるということです。教会に来たのに、救いと交わりだけではない、緊張関係もある、なんとも面倒だなと思ってしまいます。しかし、だからこそ、教会は、地上の集まりであることを超えるのです。そして、何が善であるか悪であるかは、主なる神様のみが知ると言う点に立つからこそ、すべての人に、隔てなく門を開ける場所でありうるのです。そこからまことの平和が生まれます。どの教会も、常に発展途上です。世の終わりの時、「良い麦」か「悪い麦」かの結論が出ていないからです。わたしたちの教会も、「良い麦」であり続けることを目指し、これからも歩み続けたいと思います。